

No. 55

2005年 9月 1日 発行

宇治市中央図書館
〒611-0023 宇治市折居台1-1
0774 (39) 9256

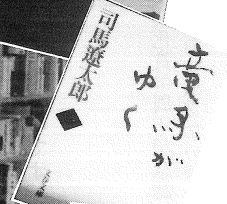
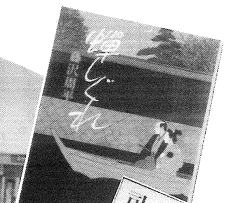
宇治市東宇治図書館
〒611-0011 宇治市五ヶ庄三番割36-5
0774 (39) 9182

宇治市西宇治図書館
〒611-0042 宇治市小倉町山際63-1
西小倉地域福祉センター3階
0774 (39) 9226

と し ゃ か ん 宇 治



西宇治図書館



「大河ドラマ」司馬遼太郎と藤沢周平

西宇治図書館長 田村博康

歴史小説が好きなこともあり、大河ドラマはほとんど見ている。最近のドラマは、ストーリーは面白いのに、主要な人物が調和していかなくて、期待はせずに感じる人が多い。

来年の大河ドラマは、司馬遼太郎の「功名が辻」だそうだが、織田信長の家臣だった山内一豊が、妻千代の支えによって出世し、土佐一國の大名になる有名な物語である。戦国時代はさまざまな人物が交差するのでそれも楽しみだ。

土佐といえば、戦国時代に長宗我部氏が統一した国であるが、関ヶ原の戦いに豊臣方についたことで、徳川家康によって取りあげられ、山内氏に渡ることになった。掛川城主だった山内氏の引きつれて行った家臣団が上士となり、長宗我部氏の家臣が郷士となって、この階級の溝が幕末維新の時に歪な形として表れることになる。これは、司馬遼太郎「竜馬がゆく」を読むとよく理解できる。郷士を中心とした土佐の勤皇攘夷派の多くが、維新を見ることもなく倒れていった。坂本竜馬もまた、郷士の出であつたので、自分の理想を追求するために脱藩することになった。

そのような歴史を頭に置いてこのドラマを見ると、いろいろと考えさせられるものがあると思うし、考えさせてくれるのは、やはり司馬遼太郎の小説の魅力によるもの大きいと思う。

時代小説といえば、もう一人の藤沢周平。東北海坂藩(庄内藩がモデルといわれている)の名もなき下級武士の哀歓を描いては定評のあるところだ。「たそがれ清兵衛」や「蟬しぐれ」など、貧しくても友への友情、愛する人への想い、家族への愛情などの情あふれる武士の世界を描いている。また藤沢周平の市井物にはファンも数多く、時が経ってもますます人気は高い。この著者の小説は、人への思いやりとやさしさに裏打ちされていて、心揺さぶられることが多い。司馬遼太郎の小説は、感動はするけれども涙が出ることはない。もともと質が違うのだから。

私は、やはり、庶民の視線で描かれている藤沢周平の小説の方が好きだ。図書館でこれらの本が借りられていくと、とても幸せな気分になったりする。人の心をうつ本はすたれることはないだろうと思う。



「紫式部文学賞」

今年で十五年

先日、第15回紫式部文学賞の受賞作品が発表されました。

この賞は、宇治市が『ふるさと創生事業』として創設したもので、対象となるのは前年に刊行された文学作品です。また、源氏物語「宇治十帖」の舞台となった当地にちなみ、「平成の紫式部」の出現を願い、女性によって書かれた作品に限られます。

作品は、エンタテインメントから純文学、短歌、学問的な研究とジャンルも広く、受賞者の年齢も二十代から九十代にわたっていて、ユニークな賞として評価を得ています。

また、受賞者は受賞後、次々と他の文学賞にも恵まれています。この事について、選考委員の一人でもある瀬戸内寂聴さんは次のように記されています。

「好運の賞と呼んでいいだろう。

紫式部は、どうやら同性の物語きには嫉妬深くて点が辛く、清少納言や和泉式部は、『紫式部日記』の中で、さんさんこき落しているが、自分の名を冠した文学賞の受賞者の同性には、どうも甘いよう

で、その人々を嫉妬したりはせず、更に運が開けるよう見守っている。としか思えない。

紫式部は、女性の物語の守護神になったらしいであろう。」

受賞式は、「紫式部市民文化賞」とともに、十一月に「源氏ろまん」のメイン行事として宇治市文化センターで開催されます。

「紫式部市民文化賞」は、「紫式部文学賞」と併せて創設され、平成三年度に作品募集が始まりました。

こちらは、市民の作品が対象で、作者の性別は問われません。受賞者と「選考委員特別賞」が間もなく発表される予定です。毎回、多数の応募があり、ジャンルも多岐にわたっています。また、個人の作品だけでなく、多くの人が力を合わせたサークル活動の成果としての作品の受賞もあります。地域に根づいた文化は、市民として誇りの持てるものです。

引用参考

紫式部文学賞・市民文化賞十周年記念誌 『千年あせぬ文学の華』

「紫式部文学賞」受賞作品一覧

	受賞作品	受賞者
第1回	『式子内親王伝 一面影びとは法然一』(朝日新聞社刊)	石丸 晶子
第2回	『きらきらひかる』(新潮社刊)	江國 香織
第3回	『十六夜橋』(径書房刊)	石牟礼道子
第4回	『淀川にちかい町から』(講談社刊)	岩阪 恵子
第5回	『アムリタ』(ベネッセコーポレーション刊)	吉本ばなな
第6回	『夫の始末』(講談社刊)	田中 澄江
第7回	『蟹 女』(文藝春秋刊)	村田喜代子
第8回	『齋藤史全歌集1928-1993』(大和書房刊)	齋藤 史
第9回	『神 様』(中央公論新社刊)	川上 弘美
第10回	『菓子子の京』(講談社刊)	三枝 和子
第11回	『釋道空ノート』(岩波書店刊)	富岡多恵子
第12回	河野裕子歌集『歩く』(青磁社刊)	河野 裕子
第13回	『浦安うた日記』(作品社刊)	大庭みな子
第14回	『愛する源氏物語』(文藝春秋刊)	俵 方智
第15回	『ナラ・レポート』(文藝春秋刊)	津島 佑子

ライブラーXの読書日記⑮

Produced by (A)

～ブックスタート 潜入ルポの巻～

赤ちゃん 3ヶ月
健診にレッツ・ゴー

～応マワ
もってい～

あかちゃん
おたんぽぽ
おたんぽぽ
おたんぽぽ
おたんぽぽ

あつこ
えほんもプレゼント

未来予想団

COOL!

えほんもプレゼント

★パパもママも一緒にたくさん読書しましょう!

図書館へようこそ

利用者インタビュー

第41回

本多康男さん

平成十五年四月からスタートした
予約図書配本サービスを、よく利用
していただいています本多康男さん
にお話を伺いました。

※図書館を利用されるようになって
からどのくらいになりますか？

☆平成三年ごろから移動図書館「そ
よかせ号」を通じてよく利用してい
ました。

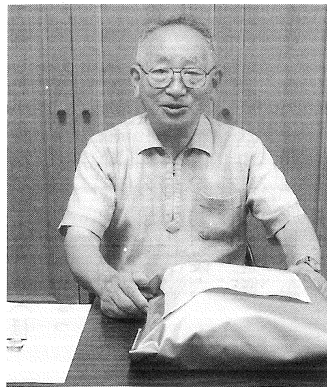
※予約図書配本では、毎回三・四冊
ほどお届けしていますが。

☆本は週に三・四冊ぐらいがちょ
どいいですね。朝、体調のいい時に
読んでいます。毎回、配本案内の電

話がそろそろかかってくるのではと
楽しみに待っています。

※それは嬉しいですね。主にどんな
ジャンルの本がお好きですか？

☆硬い内容の本から柔らかい内容の
本まで幅広く読んでいますが、とく
に、地理、歴史、鉄道関係です。速
読や斜め読みもします。



※これまで図書館にいくつかの短歌
を寄せていただいていますか。

☆毎日、日記をつけています。その
中で短歌も一句ずつ書くようにして
います。

※短歌はいつごろから始められたの
ですか？

☆平成十二年の入院を機に短歌を作
り始めました。五十句ずつまとめて
それに表紙をつけ、現在では二十集
一千句になりました。

※すごいですね。ところで図書館に
対するご要望はありますか？

☆新刊案内は楽しみで、毎回とって
あります。新刊はありがたいですね。
予約リクエストをすると、こんな本
まで取り寄せてもらえたり、買って
もらえたりするのかと楽しみにして
います。自分で買うとなると本も増
えますし、なかなか買えません。予
約図書配本サービスも毎週近くの施
設まで持ってきてもらえるので大変
助かります。この四年間余り、図書
館からの配本による読書と、短歌作
りで気分転換ができ、入院もせずあ
りがたく思っています。

※ありがとうございます。私たち
もより多くの方に利用していただ
けよう工夫していきたいと思えます。

※本多さんのプロフィール

三十九年間勤められた学校を平
成三年に退職。その後体調を崩さ
れたこともありましたが、それを
機に日記や短歌を書き、またワー
プロで自分史を作っておられます。

図書館にもいくつかの短歌を寄
せていただいていますのでご紹介
します。

★ 図書館の

週一回の 配本に

感謝するわれ 脳活性化

★ 今日もまた

宇治図書館の 本借りに

楽しみ時の 読書週間

★ 図書館の

配本を開く 今日もまた

われ楽しみ の 週のひととき

※予約図書配本サービスについて
詳しくは中央図書館(電話 三九一
九二五六)へお尋ねください。



本棚の中の宇治

徳富蘆花

『みづのたはごと』

徳富蘆花が妻たちと宇治をおと

づれたのは、明治四三年（一九一〇）十一月なかばのことである。

前日「三井寺で弁慶の力餅を食って」「石を拾ひ、紅葉を拾ひつゝ、石山寺に詣つた」一行が、ようやく宇治に着いたのは午後九時。萬碧楼菊屋に宿をとると、川沿いの座敷に通された。

白い障子越しに颯々（さあさあ）と云ふ川瀬の響（おと）が寒い。

障子をあけると、宇治の早瀬に九日位の月がきら／＼砕けて居る。ピツ／＼ピツ／＼千鳥が鳴いて居る。

この夜はかなり冷え込んだようで、翌朝見物に出かけてみると「宇治橋は雪のような霜」で、「ザクリ／＼下駄の二の字のあとをつけて渡」った。

興聖寺からの帰途、船頭のすずめるままに渡し舟へ。すると、以前来た時には見られなかった石塔が見える。

「あの塔は何かね、先（せん）には見かけなかつた様だが」

「近頃掘り出したンどす。宝塔

たら云ふてナ、あんたはん」

蘆花は、明治から大正期にかけて活躍した小説家。『不如帰（ほととぎす）』はベストセラーとなった。評論家の蘇峰は兄。明治四〇年武蔵野の農村に移住。『みづのたはごと』は、転居後六年間の田園生活を綴った記録である。その一節「旅日記から」に「宇治の朝」と題した一文がおさめられている。

船中で話題になった石塔は、もちろん宇治川は塔の島にそびえる重要文化財・浮島十三重塔である。はじめて建てられたのは鎌倉時代の弘安九年（一二八六）。西大寺の僧・叡尊が、殺生禁断のシンボルとして建立したものの。江戸時代、

宝暦六年（一七五六）の大洪

水で倒壊し、ながらく放置されていた。

ようやく再建されたのは明治四一年で、約百五十年ぶりの復活である。蘆花がおとづれたのはその二年後。知らないのも無理はない。

☆

『みづのたはごと』は、『明治文学全集42 徳富蘆花集』（昭和58年 筑摩書房）所収。貸出カウンターから見て右奥、突き当りの本棚にあります。



Taboto, Uji 塔寶多島浮 (所名治宇)

再建もないころの浮島十三重塔

利用案内

- ・市内に在住、または市内に通勤・通学されている方なら、貸出券を作ること
- ・で一人十冊三週間、本が借りられます。
- ・貸出券は全館共通です。図書館で借りた本は市内のどこの図書館へも返却することができます。
- ・図書館は九時から十七時まで開館しています。休館日は毎週月曜日、第四木曜日（いずれも祝日の場合は翌日）、祝日の翌日（土・日曜日の場合は平日に振替）、年末年始です。
- ・予約された本を市内四カ所の公共施設（木幡公民館、槇島コミュニティセンター、南宇治コミュニティセンター、開地域福祉センター）で受け取ることができます。毎週一回、木曜日の午後
- ・に搬送します。
- ・図書館で借りた本は公共施設へ返却することはできません。

あ と が き

夏休みに入ると、暑い日でも、たくさんの子供たちで活気づいていた図書館。両手でたくさんの本を抱え、うれしそうに、貸出カウンターに持ってきてくれる子供たちの笑顔を見ると、夏ばてもどこへやら。私たちが、が幸せな気分になってきます。ほんとに子供たちの笑顔は純粋で周りを和ませてくれますね。